

幸五郎の「絵」売れた

私が会長をしている杜のスケッチ会の合同展覧会が、九月七日から十二日迄南町通りの仙建ビルギャラリーでありました。杜のスケッチ会は、約三十人の方が会員で元一女高の小山喜二郎先生の指導で約十年前から、やっています。どうしてもこの手の会は、女性が多く男女共学をした事のない幸五郎は「小さいのである。それでも五人は男性がいる。仙台市内の風景を描いたり、たまには遠刈田、迫町、名取などと遠出する事も有る。皆さんも入のませんか」と勧めるのだが、「かけない」としりごみをする。幸五郎でさえ入っているのだから、どうぞ遠慮なくご参加下さい。さて今回は秋ヶ丘の東日本放送のテレビ塔の根っこと若林区旅立ち神社の付近の河原から広瀬橋と大年寺の山をのぞんだ風景をかいたものを出しました。ところがこれを買いたいと云って来た人が現れたのである。一年前の時にも東北大の文学部を描いた絵も売れたのだが、又又である。だれが買いたいと言ったかとお店であつたら、八木山に住むKさんがやって来ました。彼女はずばらしい人です。「主人を亡くして、病の義母をかかえ乍六十歳をこえてから大学を卒業してカナダのバンクーバに留学し尚かつ現在も勉強中で、自宅の玄関が殺風景なので私の絵を買いたいとの事である。この絵は、幸五郎の気持が現れたとてもやさしいタッチでかいてある。いたましい気持ちもあるがほかの方に見てもらってなんてこんなうれしいことはない。お値段はいくらと言われましたが、とても値段はついたら、新発売の「ひびきあひび

み箱」を何個か買っていた。ところで商談が成立しました。

キノコ取りで

バーちゃんとお林デパート

私の妻の実家は仙台市深沼海岸に近い農家である。私は町の中の商家です。四十五年、結婚してまもなくから妻の母から海岸の近くの防風林の松林の中から、キノコが取れるので取りに来て」と誘われました。

九月から、十一月迄三ヶ月、朝まだ日が昇る前に起き出して車で二十分。松林につきまします。まだ暗くて足元のキノコは見つかりません。ビニール袋を持って松林の中に入っていきます。もつすでに、薄明かりの中に何人か、黙々とキノコ取りの人が来ています。あちこちあるいているうちに、手拭でほつかぶりした、おばあちゃんと出会います。「なんぼ取った、ほら、やつから」といって、私達の袋に入れてくれます。やつと朝日がまぶしく松林の地面にさして来ます。今度は反対に見えにくくなります。おばあちゃんはキノコ取りの名手で、自作のキノコ取りの歌を岸壁の母のメロディーで歌いながらキノコ取りします。文句は忘れましたが、キノコを見つけたときの喜びを表現した歌でした。そのばあちゃんも十八年前に他界しました。

今年も九月がやって来ました。又朝早く起きて松林に行きます。松林の中からおばあちゃんが出て来るような錯覚におそわれます。キノコにおばあちゃんのがのりつつついているのでしよう。取れるキノコは「あみたけ」と「きんたけ」「ほつたけ」がとれます。今年も夏が暑かったからあまり期待は出来ませんが。

川崎と自由が丘見てきた

九月十六日。神奈川県川崎の「ミツタデラ」と目黒区の自由が丘を見て来ました。どちらも、人がいっぱいいるからどんな事でもやれると思う。先ずもつての印象でした。川崎のラッチタデラという所は、映画館を経営していた人が、映画館を真中にして雑貨や衣料品、中華そばや焼肉や等約三十店のお店を集めて造った商業施設である。宝石や、ミニカー等の専門店もあつた。中華そばは、そばやらしくない喫茶店風なつくりになつてた。衣料品店は風変わりなマネキンがあつて、店といつよりは劇場風でお店のネーチャンはミニスカートとジーンズスタイル、インジヨップと言つて屋台風の装置で、アクセサリを売っている。アイスクリュームやでは味見ができるのがおもしろい。三三〇〇円。二種類を一つのカップに入れてもらつて食べた。ここからバスで移動して一時間かけて目黒区の自由が丘に着いた。昭和二年に田園都市として電車線をひいて造つた若い町で丘といつだけに小高い山のようなところにまちをつくつたので軟らかいスロープになつている。道幅が狭く縦横にどこを歩いてもどこかに出てくる。高い建物が無く二階建ての小さいショップが点在。それぞれ道の名がハイカラになつている。例はヒロストリート、すずかけ道、グリーンストリート等、商店街振興組合は合同でつくつてあつて、約千軒と日本で、平川理事長さんは胸をはつた。東西に二Km、四方の中に有名な名店が二百軒が点在している。ゆつくり歩き乍お店をみているのはとても楽しい。木造二階にも店があつたり、キング

ズコートといつて中庭に木が一本あつて、そこを囲んでお店があるところもあつた。昨年出来た新しい商業施設があるといつので、助平根性で見に行った。スイツフォレストといつ日本語に訳すとあまい木の森といつことになる。ナンノ「マチャ、イメージをかきながら、歩いて数分、すこしはずれのところにある、もともってきたないアパートがあつたのを解体してつくつた。大きい桜並木がつかつていて、直ぐそば、縦横約六十mくらい、そんなに大きくないそんな土地をうまく活用しているのは関心した。いきなり二階三階しかなく、いかに階段のところに水が流れている。せせらぎの音をつくつていてのことだ。二階には造花で造つた桜がさくさく生い茂っているそんな狭いところに三十才、四十才の女性がいっぱいた。おれははずかし、キーキ屋だん、小屋が六軒ならんでいて、つくるところが見えるようになつている。シエフは外国で修業して来た人ばかり。スイツのフォレストとは、いい名前を考えた。行列しないと買えない。レストランに行つたらウエイトレスに何名さまですかと聞かれたので、見字ですといつて逃げて来た。東京といつところはなにをやつても成功する。我が荒町と比べて少々がっかりした。下に下りて見た。酒屋とお菓子の材料屋があり、地下はスーパージョになっている。裏を見たら三十台位止る駐車場もあつた。こんな物なら、皆で協同で荒町でもつくれるのでないかとふと思った。大型店でなく専門店であつていくのもひとつの方法と勉強させられました。表に出て桜並木を歩いていたら六十才代のきれいなショールを肩に着た女性に見つめられた。今日は幸五郎は着物を着てきた。すてきですねと声をかけられた。俺はうれしくなつて、その喫茶店にはいった。そこは、表が喫茶店で裏はくだんの女性が

シャンソンの教室をやっている。ピアノがあつて男の人がひいてる。おばあちゃんが一生懸命ならつていた。ちよつと見学させてもらった。自由が丘は路地裏とどりの町だ。晝盤の目のようにたてよこに町並みが出来ている。右に行こうか左に行こうかとまよつていたら、私の同業の文具屋があつた。店の名前が「貴堂」とあつた。名前からみると頑固おやじでもいるのかと思つて店に入つたらなんと私と同輩位のやさしい顔をした。おばあちゃんでした。入るなり、何あけますかと二人のパートらしきおねえさんに聞かれた。売っている物、並べ方、規模も幸洋堂と同じなので、急に親しみをおぼえ、おばあちゃん店主に同業です。視察に来ました」と挨拶した。「なかなか売れませぬね」とお互いにぐちを「ほ」合つた。ちよつと見て、昔年の文具店で変化はしてないように見受けました。さて、今日留守にして来た我が店は売れているのがちよつと心配になつた。昔からの文具店は流行らなくなつて来ましたが、なにかいい方法は無いものか、その向かいの雑貨やさんのをぞいて見た。客がいつばい入つていた。竹であんだ小物入れなど売つていた。そんな中に、のし袋がござれいに並べてある。何やでなく来客するお客様にあわせた品揃いが大事であると教えられた。ちよつと道にまよつた。地図で見ると「サンセットアレー」と書いてある。夕日が道のむこうにすずみかけていた。なるほど夕日が向こうに見える町だつた。サンセットアレー」とはつまり、洒落た名前だと関心してしまつた。そつえば荒町は東西に伸びているからサンライズあんどサンセットアレーになるななどと余計なことが頭につかん

全国区、目ざそう

二〇〇四年八月夏。星空コンサート 夏まつり、七夕と

すべて天気にめぐまれたせいも有るが大成功だつた。後半はアテネオリンピックの日本人選手の大活躍も嬉しかつた。野球の方は、東北高校、それに加えて七十七銀行、「JR」の都市対抗野球も優勝にかなり近づいたことは素晴らしい事でした。ただなかなか優勝旗が日河の関をこえられなかつた。やはり、全国一になつて、更に世界の舞台にのる事はなかなか至難のことである。そんな中でアテネに行った日本の選手は中々偉いと思う。さてこの話とあまり関係ないが幸五郎、日本高齡協同組合から九月四日、東京で会議があるから出てこいという案内がきた。テーマは生きがいであつた。なんのこともわからないまま行つてみました。小さい会議室に東京二人、大阪一人、香川、高松の人に幸五郎だけの集まりで、十時半から二時半迄、生きがいがある今年テーマであるといふ。各地で行つてゐる事業が高齡者に元氣が出る生きがいの事業をやつていますといふ報告があつた。皆さんの話を聞き乍ら少しは生きがいについて何をしゃべればいいのか考えていた。ハイ出雲さんシャベツとお鉢がまわつてきた。自分の体験を言えば説得力があると思ひ、恥かしながら私の妻の事をしゃべり出した。私の妻は、私がだまして嫁にしたいきさつが有る。だましてとつせるものではない。結婚して一年半、六ヶ月の長男を抱えて本家が倒産。路地の奥の土蔵で幸洋堂として独立する羽目におちいつた。女房突然の暗転でノイローゼになり立ち直るのに二十年もかかりました。十八年前、中央四丁目、文具館という支店をつくつて、その店長になりました。この時期に妻の母兄、弟が相前後して「く」なりました。支店はつくりましたが中々売上が上がりませんでした。私は大丈夫売上が上がるから頑張れとはげましました。そんな時、民謡を習わな

いかといつ誘いがあつました。実は、妻は店の旅行で歌を歌えと私が強制してへトを吐いた事さえ有ります。声は悪声で、民謡を習う等といふことは、本人にとつて大革命でした。毎週、毎週、それはそれは熱心に通いました。寝ても覚めてもラジカセにイヤホンをつけて民謡を習ひ続けました。発展して二味線、手品、リズム体操、南京玉すだれと次から次と趣味の時間をふやして行きました。決して遊んでばかりいませぬ。店番、店の経理も趣味でつぶれた時間は事務所、夜も寝ないで仕事もしました。今振り返つて見て彼女にとつて、民謡を習つた事が生きがいであつたのです。今はなりました。いつも話してゐることで私にとつてはさうと云つてもなかつたのですが、出席の皆さんからは感動のため息、賞讃のこばををいただきました。「生きがい」とは何ぞや、それぞれ、人によつて形、色は違つと思ひます。皆さんの生きがいは、どんなものでしょうか。ぜひ、教えてください。それにして、こんな実体のないテーマで、全国の優れた人が集まつたところで、幸五郎は臆することなく堂々の発言をするよつになりました。宮城に優勝旗を持ってこれなかつたチームもありましたが、今年の夏の思い出体験を通して幸五郎七十三歳、何とかして全国区の間人になろう。プロ野球でもいよいよ仙台も全国区だ。

男は飲むであつまる

私は友人で遠見塚に住む同年輩のKさんがいる。彼は東北学院中、高、大学を今仙台市の職員となり、定年後は公民館の館長をつとめた。学校は一緒ではなかつたが、彼の同級生でつくつてゐる月曜会なるものに誘われてもつ三年ぐらになる。現在も、会長もいない。緑ヶ丘にすむA君が幹事となつて、年三回月曜日に安い居酒屋に集まつて

一杯飲むのである。一つだけまじめな仕事は、会誌を発行することである。編集長はA君である。A4で十ページに、なんんとするのを一人でワープロ入力するのであるから、大変な作業である。「出雲さん何かいいテーマがないか」といわれたので、お互いの妻がいいのではないかと提案したら、アツサリそれで行こうといふことになり、身内の事もあり皆さんせつせと書いて編集長のところに書いてFaの出来上がりしました。お互い身辺雑記であるが、それぞれ歩んだ人生記であるから、なかなか有意義な作文である。全部紹介すればいいのですが省略しますが、題名が面白いので例記します。暖妻「ボクの奥さん」おれの女房殿「俺の女房自慢」妻に感謝しています。そして私は、榮子、幸五郎純愛物語である。皆さんに共通して言える事は、題名だけでもご理解いただけるでしよう。月曜会の妻たち万歳である。さて、のみ会で、すが前には国分町の「さくま」といふ和食屋、「こは」は親方を中心に家族の方らしい人が料理をつくつていて、とてもいいところだと思つていたが、今年のはじめから、仙台銀座のとなかつやに変わった。大きいトンカツが目玉で飲んで食べて¥三三〇〇と安い。家族経営の飲み屋で近所のサラリーマンなどでもいつも満員となつてゐる。この会はお互いなんの利害もなくなにかを決めるわけでもないから超ノンキなあつまりである。八月三十一日のあつまりでひとつ発見したことがある。東北学院の校歌は若人我等・・・は外人の方の作詩であることがわかつた。それを日本人が翻訳したものである。

キヤッチコピー

・よその女 見ちゃダメ
・九敗一勝 生きては 面倒だが
・ありました。 ちいさな幸せ 我が家に...